

## 2. 十日市をはじめとする町方文化にみる歴史的風致

### (1) はじめに

会津地方は鎌倉時代に蘆名氏が勢力を伸ばし、蒲生氏郷が文禄元年（1592）に入り、黒川の名を若松と改めて、城下を発展させていきました。現在の本市における旧市街地の原形は、天正18年（1590）蒲生氏郷の町づくりに始まったとされています。

氏郷は鶴ヶ城（若松城）・郭内侍屋敷（東西1.8km、南北1.2km）と、その周囲に外堀を巡らし16の郭門を配置し、郭外の町方と連なるよう分離区画した城下町を整備しました。

郭外には「町方」と呼ばれる商人や職人の住居が、「大町札之辻」を中心に東へ一之町、南北へ大町、西へ七日町と軒を連ねていました。そして南北の道を幹線として、東西の通りは700人を超える職人の町で構成されていました。

江戸時代になると、幕府の街道整備の命により、会津藩は慶安2年（1649）に領内を通る五街道と25の小道調査を行い、城下の大町札之辻を起点としました。また参勤交代等により街道の改修が進み、周辺が高い山々に囲まれ、地形や地質、気象的にも独特の自然環境を形成している会津は、独自の町方文化を発展させていきました。田中稲荷神社や神明神社といった歴史的建造物とともに、町方文化のなごりが伝わる十日市等が現在も開催されています。

### ①城下町方の歴史

会津において最初に勢力を伸ばしたのは相模国三浦氏一族の蘆名氏でした。蘆名氏一族が会津地方に関わりをもつようになるのは、文治5年（1189）、鎌倉政権が奥州藤原氏を滅ぼした奥州合戦の功績により蘆名氏の祖である佐原義連が会津を拝領したことによるとされています。

天正18年（1590）の豊臣秀吉による奥州仕置後、会津に入った蒲生氏郷により文禄元年（1592）に黒川の名は若松と改められました。

現在の旧市街地の原形は、蒲生氏郷のまちづくりに始まり、郭内を侍屋敷、郭外を町方として分離区画し、外側に寺院を配置した城下町を整備し、旧市街地の道筋には、近世初頭の蒲生氏郷による城下の姿が多く遺されています。

また、蒲生氏郷の会津入封に伴い、城下には近江地方などから会津に渡ってきた商人も多くいたとされ現在に至っています。

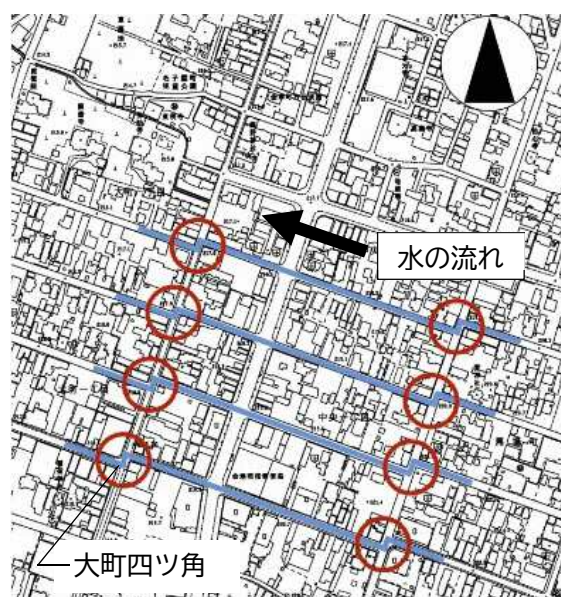
## ②町割り

蒲生氏郷による街づくりでは、郭内に一般の侍屋敷を配置し、郭外には足軽等の屋敷や社寺を町人屋敷街の周辺に配置しましたが、古い町割りの特徴として、「筋違いの交差点」（変則的な喰い違い十字路）が、現在も8箇所残されています。

蒲生氏郷の出身地である滋賀県琵琶湖畔の日野町は、旧町内の道路が緩やかに蛇行し、山側から続く主道路に添って川が流れ、道路の曲がり先の小道へも水を流す分水方式をとっていました。氏郷は、天正11年（1583）伊勢平定の功績により伊勢松坂領主に任命されると、新たな城下町を建設し、高所より流れ来る水を十字水路に用いて高低差の少ない左右の区域に流す分水方式をとっていました。

鶴ヶ城（若松城）下における「筋違いの交差点」は、市街地戦に備えた防備を目的としていた、とする説もありますが、南北方向の通りが直線であるのに対し、東西方向の通りにおいて目的をもって意図的に都市軸をずらしていることが分かります。

これらのことから、密集している町方の町人屋敷街における防火対策として変則水路を設け、城下の道路網に巡らされた水路を利用する「防火利水方式」とすることで、東から西に高低差のある扇状地における治水、利水を目的とした都市計画の一環であったと考えられています。



8箇所残されている筋違いの交差点



筋違いの交差点  
(大町四ツ角を西より望む)

## ③町方文化の歴史

人々の自由市場である「楽市の六斎市」が、正月十日の「大町札之辻」を皮切りに、城下と領内各所で年中開かれ、庶民生活の品々の流通市場として長く続いてきました。

商人たちは月々一定の日在一定の場所に集まって定期的に市を開き商売をしており、近世初期の頃になると月6回の六斎市・月3回の三斎市などの定期市がありました。商売が発展してくると、定期市に代わり一定の場所に店を構えて商売をする商人が現れ始めました。商売の仕方がこのように変わるのには、およそ17世紀後半（延宝年間頃）と考えられています。六斎市などの定期市は姿を消していきましたが、神社や寺の祭礼の日や盆・暮れには市が立ち、人出でにぎわいました。

## (2) 建造物等

### ①田中稲荷神社

たびたびの火災により社殿は、明治 32 年（1899）火事に強い土蔵造りとして建てかえられたことが墨書きから分かります。社殿は、京都にある土蔵造りの社を模して建てたとされ、京都と会津に一つずつしかないともいわれています。十日市には大町札之辻（四ツ角）を中心に南に「春日大神」、北に「住吉大神」の仮屋を建て、「市神」として祀り、市に来た人々はここでお参りします。江戸時代の 1 月 10 日の未明には俵引きを行い、米の値段を占ったといわれており、拝殿には、その際に用いられた最後の俵が残っています。また、俵引きの前に撒いていた稲穂も一束保存されています。



田中稲荷神社本殿（明治末頃）



現在の田中稲荷神社本殿

### ②神明神社

神明神社は、天照大御神を主祭とし、伊勢神宮内宮（三重県伊勢市）を総本社とする神社です。

若松の繁華街は「神明通り」と呼び、この神明神社の名に由来します。

応安 2 年（1369）神道流槍刀術の祖、飯篠山城守家直が勧請し、6 代後の孫七郎太夫盛枝が御神体を奉じ、会津に来たところ、蘆名氏の深く信仰するところとなり、門田、古川に祀らせたといわれています。その後慶応 2 年（1866）湯川のたもと中横町に遷座しましたが、戊辰の兵火で焼失しました。明治 2 年（1869）に戊辰戦争で焼失したまちが発展するよう現在地に造り遷しました。明治 4 年（1871）神明神社と改称し、現在の通り名の由来となっています。



神明神社本殿

現在の拝殿は、昭和 27 年（1952）に完成したといわれており、また、木製の灯籠には慶応 2 年（1866）と刻まれています。

1 月 10 日の十日市には神社の前に市神さまの社が建ちます。

### ③鶴ヶ城（若松城）

藩政時代は町方が出入りすることは制限されましたが、明治期以降、市民に一般開放されたことで博覧会等の各種行事が開催されるなど、市民にとってのよりどころとなり、また、多方面で町方の文化を支える場ともなりました。



④福西本店（国の登録有形文化財）

『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』（平成 11 年（1999））によると、大正 3 年（1914）建築の、袖蔵を伴う平入の土蔵商店建築です。敷地内には複数の建物が建造物群を成しています。敷地奥にある塩蔵の壁には、戊辰戦争時に土佐藩士が描いたとされる落書きが残されています。



福西本店

⑤會津壹番館

『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』（平成 11 年（1999））によると、明治 17 年（1884）に第六十国立銀行若松支店として建てられ、その後、明治 24 年（1891）に医師の渡部鼎が会陽医院として開業した土蔵造の建築物です。野口英世青年が、幼少の頃に負った手の火傷痕の手術をここで受け、医学を志すきっかけの一つとなったとされています。



會津壹番館

⑥末廣酒造(株)嘉永蔵（国の登録有形文化財）

『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』（平成 11 年（1999））によると、明治 25 年（1892）から大正 11 年（1922）にかけて建築された二階建の土蔵 5 棟、三階建の木造母屋 1 棟で構成される建造物群です。複数の建造物に接するように大屋根が架けられ大空間を形成しています。嘉永 3 年（1850）創業とされる酒造店です。



末廣酒造(株)嘉永蔵

⑦阿弥陀寺の御三階

建造物調査報告『会津 御三階』（平成 19 年（2007））によると、安永元年（1772）以前に鶴ヶ城（若松城）本丸に建てられていた中三階を有する木造三階建の御殿建築と考えられます。

明治 3 年（1870）に現在の地に移築され、昭和 49 年（1974）の同一境内での曳家を経て現在に至っています。



阿弥陀寺の御三階

## ⑧城下町方の区域に点在する建造物等一覧

城下町方も戊辰戦争により多くの建造物を焼失しましたが、明治期以降、商人等を中心に多くの建造物が建てられ、現在まで脈々と生きています。

番号	郭内・郭外 旧通り・街道筋 (旧町名)	外観	主な特徴 (配置/外観/構造/階数/屋根/外壁/(その他))	建設年代	建設年代根拠
1	郭内(城内)		平入/和/鉄筋コンクリート/5/入母屋・瓦/漆喰	昭和40 (1965)	会津若松市景観審議会 自然景観指定緑地選定部会
2	郭内(城内)		平入/和/木/1/入母屋・瓦/漆喰・板	昭和9 (1934)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成11年(1999)
3	郭内 大町通り界限 (米代一之丁)		庭園 2,420 m <sup>2</sup>	江戸 (1600~1868)	会津若松市景観審議会 自然景観指定緑地選定部会
4	郭内 大町通り界限 (米代一之丁)		石垣	享和3 (1718)	会津若松市指定文化財
5	郭内 日野町通り		平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰・下見板	大正8 (1919)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成11年(1999)
6	郭内 日野町通り界限 (本二之丁)		ー/洋/レンガ	明治41 (1908)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成11年(1999)
7	郭内 日野町通り		ー/洋/レンガ	大正10~11 (1921~1922)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
8	郭内 日野町通り界限 (本四之丁)		平入/和/木/1/入母屋・瓦/漆喰	昭和15 (1940)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
9	郭内 日野町通り界限 (五之丁)		妻入/和/木/2/寄棟・切妻・金属板/漆喰・下見板	昭和8 (1933)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
10	郭内 日野町通り界限 (五之丁)		平入/洋/木/2(一部3)/腰折れ・金属板/珧珧	昭和7 (1932)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
11	郭内 日野町通り界限 (馬場町通り)		妻入・平入/和/木/2・1/寄棟・切妻・金属板/漆喰・下見板	明治元以前 (1868)以前	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
12	郭内 日野町通り界限 (五之丁)		平入/洋/鉄筋コンクリート/3/陸・コンクリート/珧珧	昭和12 (1937)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成11年(1999)
13	郭内 日野町通り界限 (五之丁)		平入/和/木/2/入母屋・瓦/漆喰・下見板	昭和4 (1929)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成11年(1999)
14	郭内 日野町通り界限 (大町界限)		入/和/木/1/入母屋・銅板/板	和27 (952)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
15	郭内 日野町通り界限 (五之丁)		平入/和/木/1/切妻・金属板/漆喰・下見板	明治期 (1868~1912)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
16	郭内 日野町通り界限 (五之丁)		妻入/洋/木/2(一部3)/切妻・寄棟・金属板/下見板	明治44 (1911)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成11年(1999)
17	郭内 大町通り界限 (本三之丁界限)		妻入/洋/木/1/切妻・金属板/珧珧	明治45 (1912)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
18	郭外 白河・二本松街道 (大町一之町)		平入/洋/鉄筋コンクリート/2/陸/石・珧珧/地階あり	大正11 (1922)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成11年(1999)
19	郭外 白河・二本松街道 (大町一之町)		平入・妻入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰・海鼠壁	江戸後期 (1750~1850)頃	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成11年(1999)
20	郭外 白河・二本松街道 (大町一之町)		平入/和/木/1/切妻・金属板/漆喰・下見板	天保12 (1841)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成11年(1999)
21	郭外 白河・二本松街道界限 (大町三之町)		平入/和/洋/土蔵・木/2/切妻・寄棟・瓦/漆喰・海鼠壁・珧珧	明治他 (1868~1912)他	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成11年(1999)
22	郭外 白河・二本松街道界限 (三之町)		平入/和/木/2/入母屋・瓦/漆喰・下見板	昭和10 (1935)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
23	郭外 白河・二本松街道界限 (馬場町)		平入・妻入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰	大正 (1912~1926)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成11年(1999)
24	郭外 白河・二本松街道界限 (甲賀町界限)		平入/洋/木/2/寄棟・瓦/珧珧	昭和3 (1928)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
25	郭外 白河・二本松街道界限 (馬場名子屋町)		妻入・平入/和/土蔵・木/2(一部1)/切妻・瓦・金属板/漆喰・下見板	江戸、明治、大正 (1600~1926)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会

番号	郭内・郭外 旧通り・街道筋 (旧町名)	外観	主な特徴 (配置/外観/構造/階数/屋根/外壁/(その他))	建設年代	建設年代根拠
26	郭外 白河・二本松街道界限 (竪三日町)		平入・妻入/和/木・土蔵/1・2/切妻・金属板・瓦/漆喰・珧外	明治 8 (1875)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
27	郭外 白河・二本松街道界限 (竪三日町)		平入/和/木/2/寄棟・瓦/漆喰・下見板	大正 14 (1925)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
28	郭外 白河・二本松街道界限 (六日町)		平入/和/木/3/切妻・瓦/下見板	昭和 6 (1931)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
29	郭外 白河・二本松街道界限 (六日町)		平入/和/木/2/切妻・金属板/土・下見板	明治 15 (1882)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
30	郭外 白河・二本松街道界限 (甲賀町)		平入/和/木/2/切妻・瓦/下見板	大正 13 他 (1924)他	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
31	郭外 白河・二本松街道界限 (甲賀町)		平入・妻入/和/土蔵・木/2/切妻・入母屋・瓦/漆喰・下見板	明治 25 (1892)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
32	郭外 白河・二本松街道界限 (甲賀町)		妻入・平入/和/木/2/入母屋・切妻・瓦/漆喰	明治 30(1897) 34(1901)、大正 8 (1919)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
33	郭外 白河・二本松街道 (博労町)		平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰	明治 35～36 (1902～1903)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
34	郭外 白河・二本松街道 (博労町)		平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰・下見板	明治 36 (1903)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
35	郭外 白河・二本松街道 (博労町)		平入・妻入/和/土蔵/2・1/切妻・瓦/漆喰・下見板・珧外	明治 5 (1872)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
36	郭外 白河・二本松街道 (博労町)		平入/洋/木/2/寄棟・金属板/珧・珧外	昭和 2 (1927)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
37	郭外 白河・二本松街道 (博労町)		平入/和/土蔵/1/入母屋・瓦/漆喰・海鼠壁	経蔵(享保 3)他 (1718)他	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
38	郭外 白河・二本松街道 (博労町)		平入・妻入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰・下見板	江戸 (1600～1868)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
39	郭外 白河・二本松街道 界限(博労町界限)		平入/和/木/1・2/切妻・瓦/漆喰・板	明治元年 (1868)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
40	郭外 白河・二本松街道 界限(滝沢町)		平入/和/木/1/入母屋・銅板/下見板	文政 2 (1819)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
41	郭外 下野街道 (大町)		平入/和/木・土蔵/2(一部 3)/寄棟・瓦/漆喰・下見板・珧外	昭和 9 (1934)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
42	郭外 下野街道界限 (北小路町)		平入/和/土蔵/1/入母屋・銅板/漆喰	明治 32 (1899)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
43	郭外 下野街道 (大町)		平入/和/土蔵/2/寄棟・瓦/漆喰	明治 17 (1884)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
44	郭外 下野街道 (大町)		平入・妻入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰	大正 3 (1914)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
45	郭外 下野街道 (大町)		平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰	明治 16 (1883)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
46	郭外 下野街道 (大町)		妻入/洋/木/2/片側寄棟・切妻・瓦/珧外	昭和 5 (1930)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
47	郭外 下野街道 (大町)		平入・妻入/和/木・土蔵/2/寄棟・切妻・金属板・瓦/漆喰・珧外・下見板	明治 11 他 (1878)他	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
48	郭外 下野街道 (大町)		妻入/和/洋/木/2/寄棟・腰折れ・瓦/珧外	昭和 11 (1936)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
49	郭外 下野街道 (桂林寺町)		妻入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰	江戸 (1600～ 1868)、明治 (1868 ～1912)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
50	郭外 下野街道 (桂林寺町)		平入/和/木/2/切妻・瓦/漆喰・下見板	大正 10 (1921)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
51	郭外 下野街道 (桂林寺町)		平入/和/木/1/入母屋・瓦/漆喰・下見板	大正 10 (1921)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
52	郭外 下野街道 (桂林寺町)		平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰	大正 5	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
53	郭外 下野街道 (大和町)		平入・妻入/和/木・土蔵/2(一部 3)/寄棟・切妻・瓦/下見板・漆喰	明治 25～大正 11 (1892～1922)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)



番号	郭内・郭外 旧通り・街道筋 (旧町名)	外観	主な特徴 (配置/外観/構造/階数/屋根/外壁/(その他))	建設年代	建設年代根拠
54	郭外 下野街道 (融通寺町)		平入/和/木/1/切妻/金属板/漆喰・板	明治 37 (1904)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
55	郭外 下野街道 (融通寺町)		平入・妻入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰・下見板	明治 11 (1878)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
56	郭外 下野街道界限 (横丁)		妻入/和/木/2/入母屋・瓦/漆喰・下見板	昭和 6 (1931)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
57	郭外 下野街道 (川原町)		平入/和/木/2/入母屋・瓦/漆喰・下見板	昭和 2 (1927)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴 史の街づくり』平成 11 年(1999)
58	郭外 下野街道 (川原町)		平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰・E/L外	明治 45 (1912)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴 史の街づくり』平成 11 年(1999)
59	郭外 下野街道界限 (柳原町界限)		平入/和/木/1(一部2)/切妻・金属板・瓦/漆喰・下見板	昭和 24 他 (1949)他	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
60	郭外 下野街道 (材木町)		妻入・平入/洋・和/木/2・1/寄棟・切妻・瓦/E/L外・漆喰・下見板	大正 14 (1925)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
61	郭外 下野街道 (材木町)		妻入/和/木/2/入母屋・瓦/漆喰・下見板	昭和 2 (1927)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
62	郭外 下野街道 (材木町)		平入/和/木/1/入母屋・金属板/下見板	明治 41 (1908)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
63	郭外 下野街道 (材木町)		平入・妻入/和/木・土蔵/1・2/切妻・瓦/漆喰	昭和 7 (1932)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
64	郭外 米沢街道 (大町)		平入/和/土蔵/1/切妻・瓦・金属板/漆喰・下見板	明治 (1868～1912)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴 史の街づくり』平成 11 年(1999)
65	郭外 米沢街道 (大町)		平入/和/木/1/切妻・瓦/漆喰・下見板	明治 21 (1888)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴 史の街づくり』平成 11 年(1999)
66	郭外 米沢街道 (大町)		平入・妻入/和/木・土蔵/2/寄棟・切妻・瓦/漆喰	昭和 11 (1936)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴 史の街づくり』平成 11 年(1999)
67	郭外 米沢街道 (大町)		平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰・海鼠壁	明治 35 (1902)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
68	郭外 米沢街道 (大町)		平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰・E/L外	江戸～昭和 (1600～1926)頃	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
69	郭外 米沢街道 (大町名子屋町)		平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰	明治 30 (1897)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴 史の街づくり』平成 11 年(1999)
70	郭外 米沢街道 (大町名子屋町)		平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰	明治元 (1868)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴 史の街づくり』平成 11 年(1999)
71	郭外 米沢街道 (大町名子屋町)		平入/和/木/1/入母屋・銅板/漆喰	明和元年 (1764)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
72	郭外 米沢街道 (大町名子屋町)		平入/和/木/1/入母屋・銅板/下見板	江戸 (1600～1868)頃	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
73	郭外 米沢街道 (大町名子屋町)		平入/和/木/2/入母屋・瓦/漆喰・下見板	大正 8 (1919)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
74	郭外 越後街道 (七日町)		平入/洋/鉄筋コンクリート/2/陸/E/L外	昭和 2 (1927)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴 史の街づくり』平成 11 年(1999)
75	郭外 越後街道 (七日町)		平入/洋/木(土蔵)/3/寄棟・瓦/E/L外	大正 3 (1914)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴 史の街づくり』平成 11 年(1999)
76	郭外 越後街道 (七日町)		平入/洋/木/2/切妻・金属板/E/L外	昭和元 (1926)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴 史の街づくり』平成 11 年(1999)
77	郭外 越後街道 (紺屋町)		平入/和/土蔵/2/切妻・入母屋・瓦/漆喰・下見板	大正 11 他 (1922)他	会津若松市景観審議会 歴史的景観指 定建造物選定部会
78	郭外 越後街道 (七日町)		平入・妻入/和/土蔵/2/切妻・瓦/漆喰・海鼠壁	天保 5 他 (1834)他	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴 史の街づくり』平成 11 年(1999)
79	郭外 越後街道 (七日町)		平入/和/木/2/寄棟・瓦/漆喰・下見板	明治 (1868～1912)頃	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴 史の街づくり』平成 11 年(1999)
80	郭外 越後街道 (七日町)		平入/和/土蔵/2/切妻・瓦/L外	明治 43 (1910)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴 史の街づくり』平成 11 年(1999)

番号	郭内・郭外 旧通り・街道筋 (旧町名)	外観	主な特徴 (配置/外観/構造/階数/屋根/外壁/(その他))	建設年代	建設年代根拠
81	郭外 越後街道 (七日町)		平入/洋/木/3/寄棟・金属板/珞珞	大正 15 (1926)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
82	郭外 越後街道 (七日町)		平入/洋/木/2/片流・金属板/珞珞	昭和 8 (1933)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
83	郭外 越後街道 (七日町)		妻入・平入/和/木/2/入母屋・切妻・金属板/下見板	大正 (1912~1926)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
84	郭外 越後街道 (七日町)		平入・妻入/和/木・土蔵/2/切妻・瓦/漆喰・下見板	大正 (1912~1926)	社団法人福島県建築士会会津支部 『にぎわいとふれあいの場 会津歴史の街づくり』平成 11 年(1999)
85	郭外 越後街道 (七日町)		-/和/木/3/寄棟・瓦/漆喰	明治 3 (移築) (1870)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
86	郭外 越後街道界限 (西名子屋町)		平入/和/土蔵/1/入母屋・瓦/漆喰	明治 11 (1878)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会
87	郭外 越後街道界限 (西名子屋町)		-/和/鉄筋コンクリート-/笠木コンクリート/漆喰・珞珞	大正 9 (1920)	会津若松市景観審議会 歴史的景観指定建造物選定部会

※表中の「郭内・郭外旧通り・街道筋(旧町名)」の色は、それぞれ白河・二本松街道は桃色、下野街道は青色、米沢上街道は緑色、越後街道は黄色としています。



### (3) 活動

#### ①十日市をはじめとする市の賑わい

##### (ア) 起源・歴史

十日市の起源は、室町時代に蘆名直盛が黒川城を築いた時からとも、蒲生氏郷の会津入り（天保18年（1590））以降からとも言われる400年以上続くとされる伝統行事で、会津地方最大の初市です。

古くから大町通りで行われていた初市であり、大町に田中稲荷神社を祭神として仮屋をたてて祀り、商売繁盛、子孫繁栄を祈りました。かつて近郊の農家では、田畑の肥料として町方の家と汲み取りの特約をしていたこともあり、この初市の日にお礼を兼ねて大豆一升を紙袋に詰めて年始回りをしていました。一方、町家では「町年始」といって、この年始客を酒と棒鱈や「こづゆ」でもてなしたといわれています。

市ではそういった農家の人々の需要に応えるために、縁起物である起き上がり小法師や風車、市飴、また、酒やみそ、醤油、会津漆器、絵ろうそく、会津木綿など、多種多様な物が売られていました。また、この日に「市塩」といって小さな藁ごに包んだ塩が売られていました。この塩を囲炉裏や火鉢などの火を焚くところにまいて清めたといわれ、現在も縁起物としてその風習が残っています。

##### (イ) 現在の活動

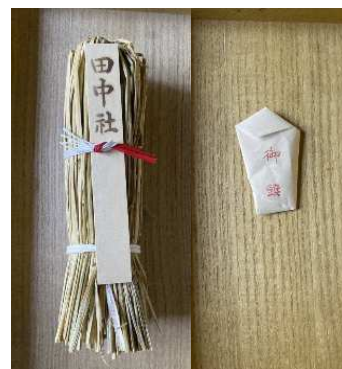
市で売られるもののなかで人気のあるものは、風車や起き上がり小法師などの縁起物です。店頭には並ぶ生活用品は変わっても、この縁起物は変わっていません。これらの玩具は、蒲生氏郷が無役の藩士の内職として作らせ、正月の縁起物として売り出したのが始まりと伝えられています。

田中稲荷神社の仮屋建ての流れ

日付	内容
1月9日 15時30分	仮屋を建てる
1月10日 8時	御神体（春日大神、住吉大神）移動 お社で参拝者の対応
20時	御神体（春日大神、住吉大神）移動
21時	撤収



十日市の開催場所



市塩(左)と米(右)の縁起物



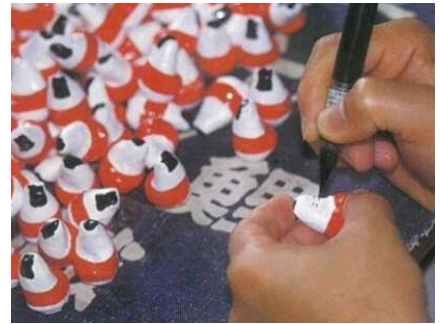
道路中央に建てられる仮屋

## (ウ) 縁起物等に代表される手仕事

### i) 起き上がり小法師<sup>こぼうし</sup>

「小法師」は、和紙の張り子細工です。2個を尻でつなぎ合わせた木型に和紙を張り、乾かしたあと、真ん中で二つに切り木型からはがします。粘土をまるめたおもりを底にはめて糊付けし、赤と黒で彩色します。

「起き上がり小法師」は七転八起の「転んでもすぐに起き上がる」にちなみ、健康で忍耐強く生活できるようにとの願いが込められています。また、家族が増え、子孫が繁栄し、身上<sup>しんしやう</sup>（財産）が増えるようにと縁起をかつぎ家族の数より一個多く買い求めることが習わしとなっており、市では、顔、形が好みのものを選び、店先においてある丸い小さなお盆に放り入れ、起き上がり具合を見定め購入する様子が見られます。



起き上がり小法師作製の様子

### ii) 風車<sup>かざぐるま</sup>

八本の細かい竹で籠を作り、中心部は乾燥させた豆で止め、籠の端の竹を伸ばして紙の羽を張ります。

風車がクルクルと回るように、仕事や金回りが良くなり、身上が良くなるようにとの願いを込めて神棚に上げて「一年間風車のようにマメ（元気）に働けるように」と祈願します。

現在では各家庭の様式に合わせた風車が販売されており、色味や大きさを吟味しながら買い求める様子がみられます。



風車販売の様子

### iii) 市飴<sup>いちあめ</sup>

三温糖、麦芽糖、水飴、小麦粉のみで作られた十日市で売られる縁起物の飴です。

昔、飴は大変貴重なものであり、滋養に富んだ飴をなめて、無病息災と家内安全を祈願したとされます。水飴は何回も繰り返し練り合わせ、空気を吸収して赤褐色から白くなります。

現在は、機械で練り合わせることで、こしの強い飴になっています。近年、飴の色や形は様々になりましたが、昔ながらの飴も作り続けられています。



手作りの市飴



## (エ) お日市

商人たちは毎月一定の日により一定の場所に集まって市を開き、商売をしていたとされます。延宝年間（1673～1681）の頃になると商業が発展し、定期市にかわって一定の場所に店を構えて商売をする者が多くなり、月に6回開かれる六斎市や、月に3回開かれる三斎市などの定期市は姿を消していきましたが、お日市と呼ばれる神社や寺院の祭礼の日には華やかに市が立ち、多くの人出で賑わったとされます。

お日市とは、いわゆる縁日であり、各町内で行われてきた神社や寺院での祭礼日に限り開かれていました。

古いものは、約400年前の蒲生氏郷の時代から続き、高度経済成長期以前の昭和30年代の頃には盛大に行われていましたが、現在では規模は縮小しながらも地域住民の手によって今日まで守られ、受け継がれてきました。

現在でも、7月1日に長福寺で行われる御姥尊（通称おんば様）のお日市から、9月8日に弘真院で行われる館薬師（通称館の御薬師様）まで、45の神仏の縁日が市内各地で行われており、お日市の開催地となる町内では、開催の数日前より通りの上空に日の丸を横断していくつも掲げ、周知する習わしとなっています。

	開催日(例)	祭礼地	所在地
1	7月1日	御姥尊・長福寺	日新町
2	7月5日	藤森稲荷神社	新横町
3	7月5日	安光賀稲荷神社	大町二丁目
4	7月7日	三宝胞衣荒神社	七日町
5	7月7日	瑠璃光薬師如来・観音寺	大町一丁目
6	7月8日	大日如来・弥勒寺	大町一丁目
7	7月10日	石小稲荷神社	馬場町
8	7月10日	天光稲荷神社	西七日町
9	7月10日	田中稲荷神社	大町一丁目
10	7月12日	福満虚空蔵尊・興徳寺	栄町
11	7月13日	鶴ヶ城稲荷神社	馬場町
12	7月14日	荒神社	馬場町
13	7月15日	津島天皇社	上町
14	7月15日	八幡神社	山見町
15	7月16日	石塚観世音菩薩	川原町
16	7月17日	聖観世音菩薩・実相寺	馬場本町
17	7月19日	鬼渡神社	石堂町
18	7月20日	赤沼稲荷神社	旭町
19	7月21日	聖徳太子・光明寺	七日町
20	7月22日	笠間稲荷神社	七日町
21	7月22日	豆腐地藏尊	中央二丁目
22	7月23日	千手観世音菩薩・千手院	千石町
23	7月23日	櫻ヶ丘出世地藏尊	東栄町
24	7月23日	柿本稲荷神社	西七日町
25	7月23日	愛宕神社	東山町
26	7月23日	子育地藏尊	金川町
27	7月24日	熊野神社	大町二丁目
28	7月24日	延命地藏尊	大町二丁目
29	7月24日	文殊菩薩・自在院	相生町
30	7月25日	柳原天満宮	柳原町
31	7月27日	諏方神社	本町
32	7月28日	鶴ヶ丘稲荷神社	城前
33	7月30日	八角天満宮	宮町
34	7月30日	八角神社	宮町
35	7月31日	住吉神社	材木町一丁目
36	8月1日	蚕養国神社	蚕養町
37	8月3日	小館山稲荷神社	本町
38	8月4日	神明神社	神明通り
39	8月5日	中川原大日如来	湯川町
40	8月8日	崖薬師如来	新横町
41	8月8日	大日如来・大日堂	花春町
42	8月12日	福満虚空蔵菩薩・常光寺	七日町
43	8月23日	六地藏尊	門田一ノ堰
44	8月24日	御造酒地藏尊	大町二丁目
45	9月8日	館薬師・弘真院	門田年貢町

### お日市の開催場所と時期

「会津若松お日市まっぷ」より

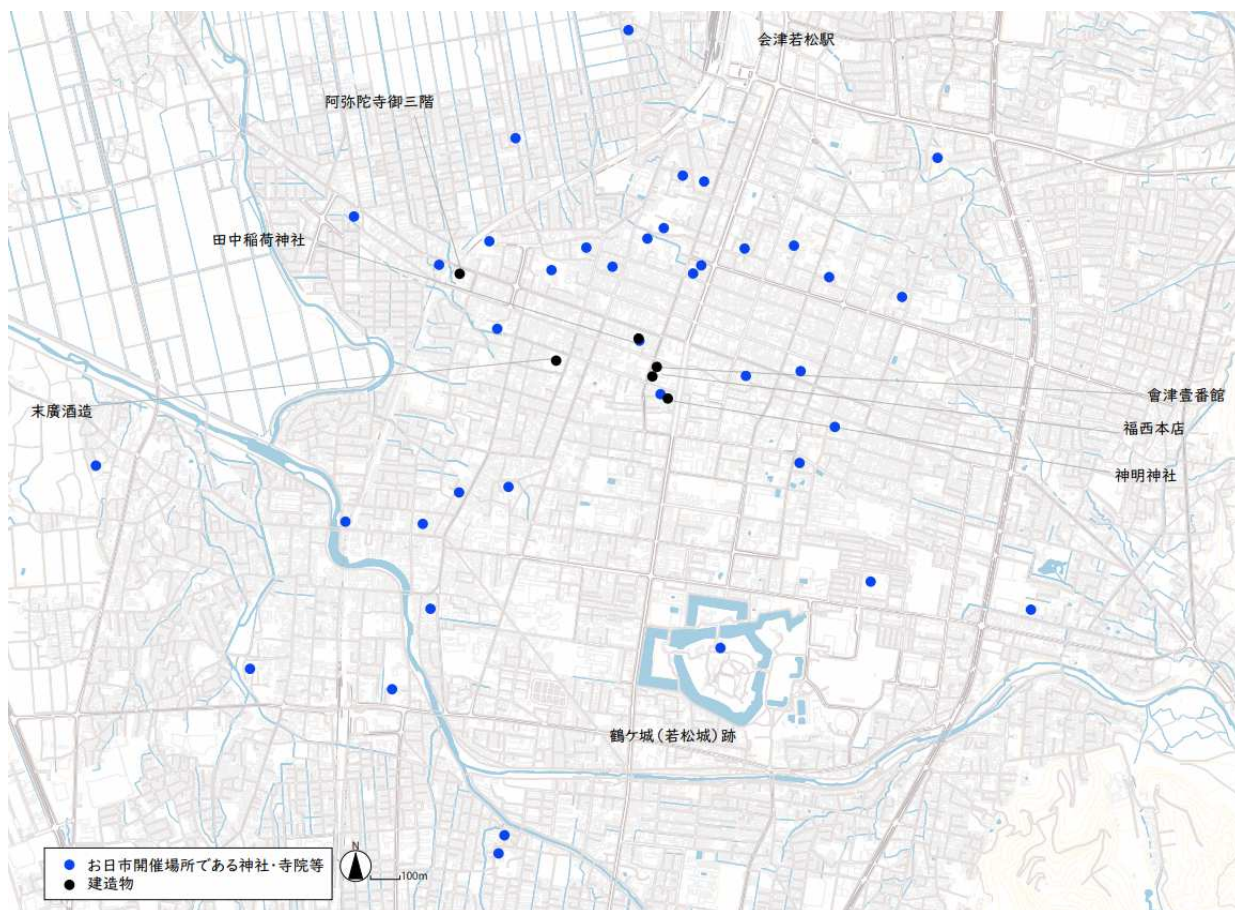


老若男女で賑わうお日市（おんば様）



通りの上空に掲げられる日の丸

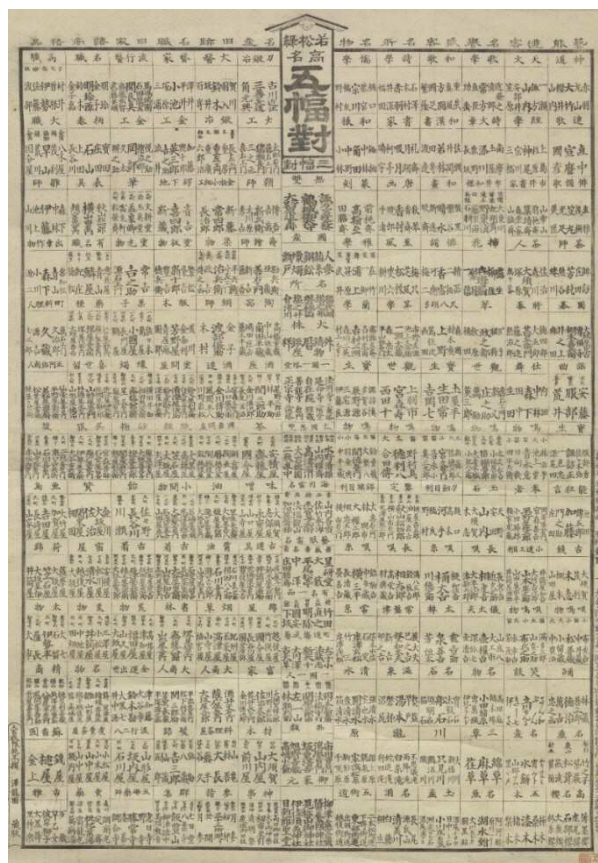




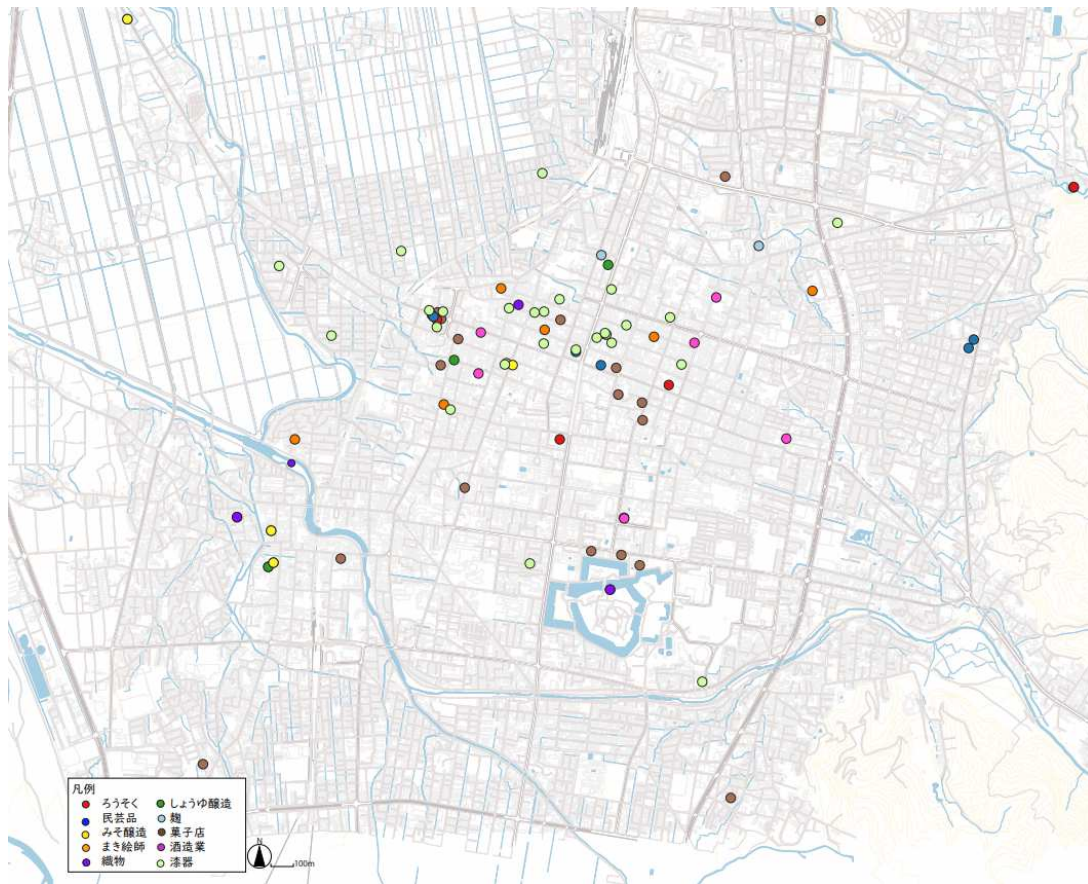
お日市の開催場所

(オ) 町方文化を継承して営まれている店舗  
町方の区域では、現在も漆器や酒造、みそ、醤油等の醸造など、伝統的な産業を生業とする人々が多く住んでいました。

会津藩政下における商人や職人、さらには名所、名物、学問や芸能まで番付した『若松緑高名五幅対』(嘉永5年(1852))には、現在も営業を続けている店が記載されていることから、町方の文化が継承され、脈々と生き続けていることが分かります。



『若松緑高名五幅対』



町方文化を継承して営まれている店舗



## ②彼岸獅子

### (ア) 起源・歴史

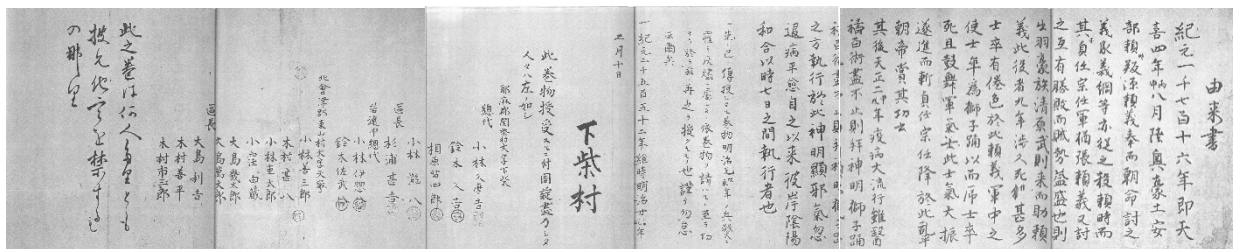
会津地方では、三匹の獅子に扮して行われる、  
ひとりだちさんびきししまい  
一人立の三匹獅子舞が古くから続けられており、春彼岸中に各獅子団がそれぞれの地区と近郷の市街地に出て無病息災・家内安全・商売繁盛を祈願しながら各家々や商店などの門付け、あるいは座敷に招かれて獅子舞が行われたことから、彼岸獅子舞と呼ばれるようになりました。

この笛や太鼓の音は会津の人々にとって雪に閉ざされた長い冬から、春の訪れを知らせる快い調べであり、「春を呼ぶ彼岸獅子」とも呼ばれる会津地方を代表する民俗芸能です。

その起源は、寛永年間（1624～1644）に下野国（栃木県）より現在の喜多方市に伝わり、その後、本市域に広まったとされ、残されている当時の文書から知ることができます。また、他の地域には、正保2年（1645）に那須地方（栃木県）より現在の下郷町を経てもたらされたという文書や、佐竹野口村（茨城県）より伝授されたという文書も残されており、北関東地方から伝わってきた文化とされています。



城下町方で繰り上げられる彼岸獅子舞  
大正7年（1918）



伝授を示す文書

戊辰戦争前までは会津地方の各地域に30組があったとされ、『若松風俗帳』（文化4年（1807））によると、各獅子団がまちなかで「笛を吹き、太鼓を打ち、剣舞弓くぐり等芸をなす」と記されていることから、古くから城下町方の周辺を中心に活動が行われてきたことがうかがい知れます。

また、大正12年（1923）に鶴ヶ城（若松城）において会津彼岸獅子団を結成して第1回大会が開催され、昭和9年（1934）4月の地元紙にも「会津における獅子団主催の獅子競舞大会が開催され13組が参加した」との記事があることから、戊辰戦争後は数を減らしながらも彼岸獅子は継承されてきたことが分かります。

小松彼岸獅子が昭和47年（1972）に、また、てんなん  
大寧彼岸獅子舞・しもい  
下居合彼岸獅子舞・本滝沢彼岸獅子舞が「会津三匹獅子舞」として、平成16年（2004）に市の無形民俗文化財に指定されています。（下居合獅子舞は現在活動休止中）



鶴ヶ城（若松城）に入場する  
昭和初期頃の彼岸獅子



春を呼ぶ彼岸獅子



## (イ)現在の活動

現在では会津地方で活動する8組の獅子団のうち3組が会津若松市域で活動を続けており、春彼岸には依頼を受けた商家などを中心に、まちなかで舞が披露され、鶴ヶ城（若松城）内での演舞も行われています。

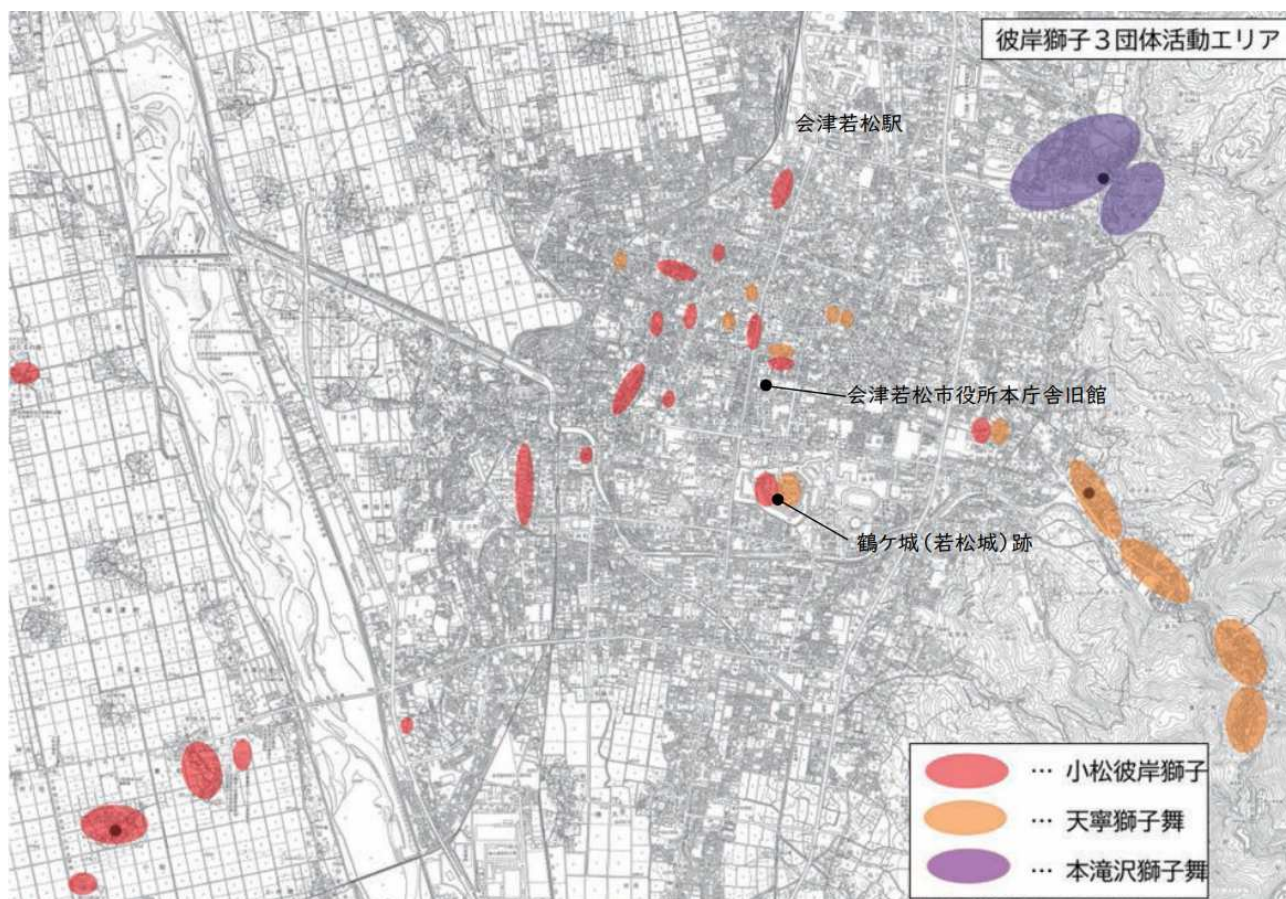
獅子は、獅子頭を1人にかぶる「一人立の獅子」で、太夫獅子、雌獅子、雄獅子の3匹で構成されます。獅子頭の意匠は鹿や猪といったシシからきているとされ、目・鼻・口は大きく、頭に光沢のある黒い鳥の羽をつけ、舞手の顔に当たる獅子の口の下に絹の薄生地で作った頬掛け<sup>ほおか</sup>をつけ、獅子団ごとに矢車、鶴丸、下がり藤等の白い紋が染め抜かれています。また、腰に結びつけられる腰下げの色も異なり、背中や袖に鳳凰や鳳凰にちなんだ羽の柄の描かれた上衣を着て、無地または波模様が染め抜かれた袴をはきます。手には手甲をつけ、足元は白や黒の足袋に草鞋や草履姿となります。前腰に横打ちの小太鼓を結わいつけ、両手に細い撥<sup>ばち</sup>を持ち、笛や太鼓のお囃子に合わせて前腰の小太鼓を打ちながら舞を演じます。演目は、三人舞と一人舞があり、各獅子団により内容が異なります。

各獅子保存会の衣装比較

i) 小松彼岸獅子（小松獅子保存会）	ii) 天寧獅子舞（天寧獅子保存会）	iii) 本滝沢獅子舞（本滝沢獅子保存会）
太夫獅子：(頬掛けの紋様)会津葵／(腰下げの色)白 雌獅子：(頬掛けの紋様)鶴丸／(腰下げの色)赤 雄獅子：(頬掛けの紋様)矢車／(腰下げの色)紫 ※太夫獅子の頬掛けには会津葵紋が入ります	太夫獅子：(頬掛けの紋様)矢車／(腰下げの色)水色 雌獅子：(頬掛けの紋様)鶴丸／(腰下げの色)赤 雄獅子：(頬掛けの紋様)下がり藤／(腰下げの色)紫 ※太鼓と手甲が花柄です	太夫獅子：(頬掛けの紋様)矢車／(腰下げの色)白 雌獅子：(頬掛けの紋様)鶴丸／(腰下げの色)赤 雄獅子：(頬掛けの紋様)下がり藤／(腰下げの色)水色

各獅子保存会による衣装と演目等の比較（詳細）

	小松彼岸獅子	天寧獅子舞	本滝沢獅子舞
獅子頭	太夫獅子 / 雌獅子 / 雄獅子	太夫獅子 / 雌獅子 / 雄獅子	太夫獅子 / 雌獅子 / 雄獅子
頬掛け紋	会津葵 / 鶴丸 / 矢車	矢車 / 鶴丸 / 下がり藤	矢車 / 鶴丸 / 下がり藤
			
上衣	袖に鳳凰の紋	鳳凰の染め抜き	背中に鳳凰（雌獅子のみ口を開ける）
袴	黒地に模様なし	紺地に白波模様 下部に白・赤・白の横線	紺地に白波模様 下部に白・赤・白の横線
腰下げ	白 / 赤 / 紫	水色 / 赤 / 紫	白 / 赤 / 水色
太鼓	赤	花柄	赤
			
その他	手甲(白)・脚絆(黒)・黒足袋に草鞋	手甲(花柄)・脚絆(赤)・白足袋に雪駄または草鞋	手甲(赤)・脚絆(赤)・白足袋に雪駄または草鞋
幣舞小僧	化粧(道化面なし)※幼稚園児、保育園児が担当	道化面(ヒョットコ)幣束・鈴※現在は大人が代役	※現在は用いていない
	—		—
演目	(上段)三匹舞 / (下段)一匹舞	(上段)三匹舞 / (下段)一匹舞	(上段)三匹舞 / (下段)一匹舞
	庭入り・大桐・岡崎・山おろし・雌獅子隠し 弓舞(太夫獅子)・棒舞(雌獅子)・幣舞(雄獅子)	庭入り・山おろし・袖舞 弓舞(太夫獅子)・幣舞(雄獅子)	庭入り・ぼっこみ・足ざろえ・矢車・獅子くい・袖舞 弓舞(太夫獅子)・棒舞(雌獅子)・幣舞(雄獅子)

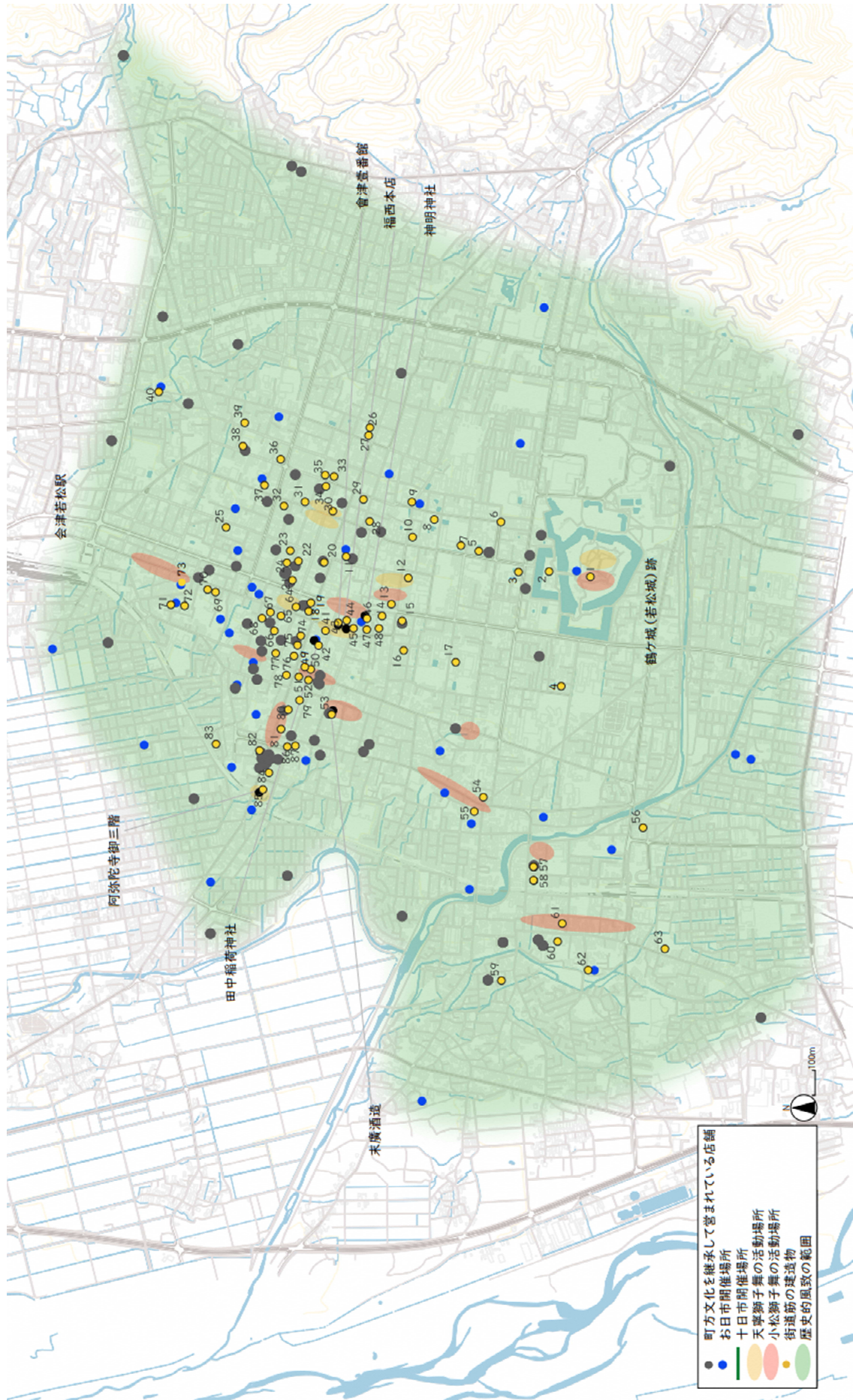


まちなかでの演舞箇所

#### (4) おわりに

蘆名氏から松平氏まで各代の藩主が守り、発展させてきた城下町は、会津盆地の豊かな恵みを受けて様々な町方文化を開花させてきました。現在では、作業の多くが機械化されたものもありますが、町方文化に携わる人々の想いは手仕事により生み出される品々に込められ、土蔵などの歴史的な風情を感じさせる街なみを背景に行われる十日市や彼岸獅子舞等の賑わいとともにより独自の歴史的風致を形成しています。





歴史的風致の範囲



## 【コラム①「民俗芸能の継承」】

会津藩家老の山川大蔵<sup>やまかわおくら</sup>は、戊辰戦争において日光方面に出陣し、板垣退助<sup>いたがきたいすけ</sup>や谷干城<sup>たにたてき</sup>の率いる西軍を一時破るなどの活躍をみせていましたが、藩命で帰城することとなりました。しかし、既に西軍で満ちた城下への入城は極めて困難な状況でした。

小松村（北会津町）まで行軍してきた山川は、ここで一計を案じ、村に伝わる彼岸獅子の笛・太鼓衆を集めさせ、楽隊をつくり先頭に配し、奏楽に合わせて城下を行進し、一兵も損ずることなく入城を遂げたという逸話が残されています。

この功績により、戊辰戦争後の明治4年（1871）に御薬園に招かれた小松彼岸獅子は、旧藩主の松平容保より会津葵紋が下賜され、太夫獅子の頬掛けの紋様が引き継がれています。

会津地方における彼岸獅子舞の殆どは、各集落において後継者以外には教えないという掟がありましたが、近年では後継者不足への対策として民俗芸能を守る取組みが始められています。

小松獅子保存会では小松地区にある川南<sup>かわなみ</sup>小学校生に地元の民俗芸能を伝授するため、平成12年（2000）に「川南小学校獅子クラブ」を設立し、舞と囃子の練習と指導を続け、地区内にある介護施設への慰問や地元の祭礼の場で披露してきました。

平成22年（2010）より、小学校4、5、6年生を対象とする総合学習（年間15時間程度）として継続され、設立から20年以上が経過した近年では、当クラブに所属していた小学生が成人し、小松獅子保存会に入会する事例もみられるなど、民俗芸能の継承が行われています。



川南小学校での彼岸獅子の学習風景

## 【コラム②「郭外の旧町名と現在の町名」】

蒲生氏郷の会津入りに伴い、それまで郭内にあった商人の屋敷は郭外に移されるなどして、現在の城下町の原形となる整備が行われました。

町の立地条件や地区内に住む者の職位や職種に因んだ名が町名となっていることが多く、昭和40年（1965）以降の新住居表示施行により旧町名の多くは消えましたが、市内各所に旧町名のサインが設置され、また、現在でも町内会名として多く使用され続けるなど市民の生活に密接に関係しています。

以下に示す一覧は、文化6年（1809）に会津藩が撰した『新編会津風土記』（享和3年（1803）～文化6年（1809））に上町、下町として記載されている町名です。



旧町名の由来を記したサイン

区域	旧町名	呼称	由来・特徴など	現町名
上町	大町	おおまち	郭外より移された 商人の町、大正期以降は金融街	大町／中町
	馬場町	ばばまち	郭内より移された 商業・手工業者の町、明治期以降は官公庁・金融街	馬場町／馬場本町／中央一丁目／中央二丁目
	一之町	いちのまち	城郭側一番目の通り、商業・手工業者の町 明治期以降は官公庁・金融街	馬場町／中央一丁目
	二之町	にのまち	城郭側二番目の通り	上町／馬場町／中央一丁目
	三之町	さんのまち	城郭側三番目の通り 漆職人が多く住んだ	馬場町／中央一丁目
	四之町	しのまち	城郭側四番目の通り 漆職人が多く住んだ	上町／馬場町／中央一丁目
	五之町	ごのまち	城郭側五番目の通り	上町／馬場町／中央一丁目
	甲賀町	こうかまち	蒲生時代に近江からの随伴者が住んだ 加藤時代に日野町から甲賀町に改名	上町／馬場町／馬場本町／相生町／中央一丁目／中央二丁目
	大工丁	だいくちょう	大工などの工匠が多く住んだ	栄町／上町
	六日町	むいかまち	近郷の本郷町より移り住んだ 6のつく日に三斎市が開かれた	栄町／上町／宮町
	博労町	ばくろうまち	馬市が開かれ、博労（馬の仲買人）が多く住んだ 鍛冶職人が多く住んだ	上町／相生町
	槻町	つきのきまち	大きなケヤキがあった（槻はケヤキの古名）	上町／宮町／行仁町
	竪三日町	たてみっかまち	近郷の本郷町より移り住んだ 3のつく日に三斎市が開かれた	上町／行仁町
	本郷町	ほんごうまち	近郷の本郷町より移り住んだ	
	野伏町	のぶしまち	近郷の本郷町より移り住んだ 弓足軽が多く住んだ	上町／行仁町／相生町／旭町
	中六日町	なかむいかまち	木市が開かれた	
	鳥居町	とりいまち	蒲生時代に道が通され、八角神社の石鳥居が町なかに残された	宮町
	杉丁	そまちょう	杉（木こり）が多く住んだ	
	南横町	みなみよこまち	屋敷町の南に通された町	宮町／行仁町
	屋敷町	やしきまち	蒲生氏郷の母の屋敷が置かれ御屋敷町と呼ばれた	
	台町	だいのまち	台状の周囲より高い土地	宮町／行仁町
	横三日町	よこみっかまち	近郷の本郷町より移り住んだ 3のつく日に三斎市が開かれた	
	愛宕町	あたごまち	東山麓山村の愛宕山に通じる道	行仁町
	阿弥陀町	あみだまち	阿弥陀堂があった	
	寺町	てらまち	寺院の多い町	行仁町／旭町
	組町	くみまち	足軽（下級の武士）・同心（下級の役人）が多く住んだ	
	中六日町横丁	なかむいかまちよこちょう	弓町とも呼ばれ弓足軽が多く住んだ	行仁町／旭町
	東名子屋町	ひがしなこやまち	名子（小作農や下級武士）が多く住んだ	
	行人町	ぎょうにんまち	行人（仏道修業者）が住んだ	本町
	堀江丁	ほりえちょう	近郷の本郷町より移り住んだ 御家人と職人が住んだ	
区域	旧町名	呼称	由来・特徴など	現町名
下町	老町	おとなまち	楼があったことから楼町と呼ばれ、「老」の字に変化し、「おとな」と呼んだ	中町
	桂林寺町	けいりんじまち	昔、この地にあった桂林寺にちなんだ	中町／西栄町／日新町
	北小路町	きたこうじまち	老町の北に並行した	大町一丁目／中町／七日町／日新町
	七日町	なぬかまち	7のつく日に三斎市が開かれた 商人、旅館屋が多かった	
	紺屋町	こんやまち	紺かき（藍染めの染物職人）が多く住んだ	大町一丁目／七日町
	原町	はらのまち	職人が多く住んだ 葎原があった	
	後分町	ごのぶんちょう	桂林寺町の後方に続く町 商業・手工業者が多く住んだ	大町一丁目／大町二丁目／七日町
	道場小路	どうじょうこうじ	原町の北に位置する 時宗寺院の道場があった	
	大和町	やまとまち	佐瀬大和（輩名盛氏の家臣）の邸が住んでいた	七日町／日新町
	西名子屋町	にしなこやまち	名子、譜代（奉公人）が多く住んだ	
	当麻丁	たいまちょう	時宗寺院の当麻山東明寺に近かった	日新町
	当麻仲町	たいまなかまち	漆師（漆器）が多く住んだ	
	針屋町	はりやまち	針師（針工）が多く住んだ	日新町／本町
	善久町	ぜんきゅうまち	善久寺があった 職人が多く住んだ	
	赤井丁	あかいちょう	赤井因幡（輩名盛氏の家臣）の邸が住んでいた	本町
	諏方四谷	すわつや	もと諏方神社の境内地にあり、外濠が通ったことで二分された	
	融通寺町	ゆうづうじまち	融通寺があった	

※呼称は昭和40年（1965）以降の新住居表示施行前までに一般に使われていた代表的な呼び方